

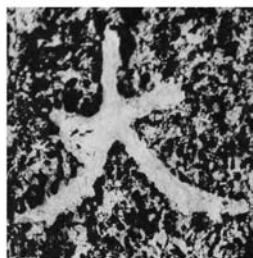
日本の金石文② 「宇治橋断碑」 大化二年（六四六）

浼浼橫流其疾如箭
 世有糺子名曰道登
 即因微善爰發大願

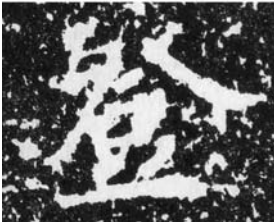
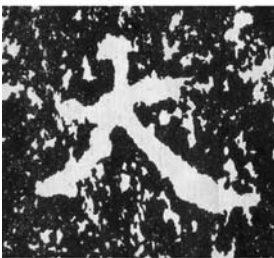
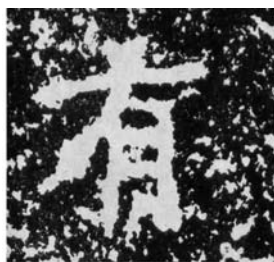
図①「やや縮小・釈文」

浼浼橫流 其疾如箭 修（々征人・）
 世有糺子 名曰道登 出（自山尻・）
 即因微善 爰發大願 結（因此橋・）

鄭道昭



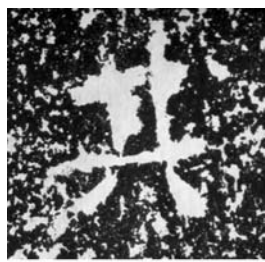
宇治橋断碑



鄭道昭



宇治橋断碑



図②「鄭道昭の書」と「宇治橋断碑」の比較

図③「宇治橋断碑」



『宇治橋断碑』は、日本に現存する最古の碑とされる。京都府宇治市の放生院に安置されている。大化二年（646）に宇治橋を建設した時の碑と伝えられている。（重要文化財、碑の建立年月に関しては、更に後の時代とする説もある）。碑形は、図版③の様な形をしているが、上部の三分の一が当時のもので、下の部分は江戸時代に記録資料により補われた。右頁の主図版①の拓本が、碑の上部にあたる。界線が刻され、三行に分けられている。原碑は、二十四字ほどしか見ることが出来ない。大化二年（646）は、初唐の貞観二十年にあたるが、書風は、六朝の楷書体そのものである。『宇治橋断碑』の書風に近い北魏の書としては、鄭道昭（？—516）の楷書が挙げられる。共通する六文字を取り出し、文字の大きさをほぼ同じに直したのが、図②である（「登」は、『論經書詩』、他の5文字は、『鄭義下碑』から集字した）。時代は、約一世紀以上の差があるが、文字構成をはじめとして筆勢に共通するところが多い。

書道芸術院

平成の群像 (2014)

金生麗水



33×23cm

その後、争坐位稿などの含墨で迫力と圧力を、筆の開閉をコントロールしながら書くさまは、高校生の私には至難の技であった。もしかしたら私の弱点だったのかも知れない。だが、その何十年後には、大

好きな作風ともなった。ある時、私が指導にあたって悟った事がある。書法には得意な分野、苦手な分野があるが、磨きをかけるとそれは何と最大な強さに豹変していく。例えば「この筆法は私には無理です」と弟子が言った言葉、「いや、好ききらいせず何でも消化し吸収してみよう」と。その問答が当にこの事であった。技術が鍛錬された晩には、見事に開花する。その結果、それは最大の武器と成り得る。人も同じではないだろうか。短所（欠点）を誰が判断するものなのか。どこに基準があるのだろうか。そして、誰がその枠の中に押し込まないのか。欠点を頭から決めつけず、方向性を導く人がたくさんいれば……。

私の書の世界は、枠にはめ込むことのない自由闊達で個性豊かな底辺のしっかりした作品創りに心を委ねたい。

その答えの一つとして、社中で行う錬成会、会員一同を会しての実のある行事、始めて筆を持った方はどうすべきか？

未知への世界へとスタートする。

ピンと張りつめた緊張感は肌で感じる。この足場が固まって鍛錬された筆の妙技が苦しみの中から生まれた作となる。この教えをこれから開眼されていく小さな子供達へと受け継いでいく事を願ってやまない。

この想いを大切に、同じ風の中に立つ仲間、門人達とも書の魅力を借りて、人生の書の旅を私は続けてゆきたいと思う。

今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

昨日に後悔せず
今日に奢らず
明日に怯えず

の精神で書の旅路を続けている私。
幼ない頃から筆が持てる環境に恵まれながらも心との葛藤しつつ、感謝の念で筆を走らせている今日この頃。
過去を振り返ると、故種谷扇舟先生には小学生より学び、楽しい書、心豊かな書、



半田藤扇

数限りなく自由に書かせていただく。中・高・大学へと進むにつれ古典臨書の難しさ、理解度へのご指導いただき今、現在私の根底には楮屋良の技法が心の中に漂っている。中学生の時、忘れることの出来ない先生からの言葉「今日は、楮法で書いてみなさい」と、「空中撮影」と書いた。その作品は、前文部次官賞を受賞した。中学生にこのような做書体験をさせていただいたことは感謝に耐えないしだいである。

その後、争坐位稿などの含墨で迫力と圧力を、筆の開閉をコントロールしながら書くさまは、高校生の私には至難の技であった。もしかしたら私の弱点だったのかも知れない。だが、その何十年後には、大

書のひろば

理事長 辻元大雲

第67回書道芸術院展 大雪の中盛況に開催

時ならぬ大雪に数度見舞われながら、第67回書道芸術院展の作品搬入、特別審査、陳列、開会と波乱の幕開けとなった。

2月8日東京都美術館への作品搬入は午前中の搬出団体とぶつかり、さらに未明からの雪は激しくなるばかりで大変な苦勞であった。なんとか夕刻までには搬入を完了できたのは総務部および関係各位のお蔭。

翌9日の審査会員候補対象の特別賞審査は、晴天となったが、あたり一面30cm近い積雪の中行われた。どうしても交通事情で夕刻到着された選考委員もおられたが、幸い大半が前日泊をしていたので無事スタートできたのはありがたかった。10日の審査会員対象の特別賞選考も無事行われ、今回より新設定の「書道芸術院春華賞」は漢字部半田藤扇さんに、併せて本年の秋季展推薦作家、選抜作家の選考も本院理事監事による選考委員会にて決定した。

15日の陳列作業もまたまた大雪に見舞われた。前日からの雪はやはり30cm

近い積雪となり都内はもとより関東、東北一体観測史上記録的な大雪となった。当日はきれいに晴れ渡ったが交通機関はマヒ、足元は不安定で会場の上野公園を横切って都美までが大変であった。朝の集合時間に間に合ったのはお手伝いの方が約8割、陳列業者は半分くらいしか間に合わなかったようだ。午後になり、作業途中に駆けつけてくださった方が多かったが何とか作業にあたってくださった。そんな状態であったが陳列作業は順調に進み、午後3時の記者会見は予定通り開催できた。



大雪の中、数人での陳列作業開始

翌16日からの会期、東博平成館大ホールでの学生展表彰式、帝国ホテルでの

作品解説会、一般展表彰式、祝賀会などは大雪の影響の残る中無事終了した。ただ長野や前橋方面の方々はどうしても来られず残念であった。

以下詳細は、5月号掲載予定の実行委員長報告を参照いただきたい。

第66回毎日書道展企画展示 「毎日書道・海外交流のあゆみ」 写真など資料のご提供を

毎日書道展の海外展は、日本の書の魅力を世界に発信する目的で1970年フランス・パリ展から始まった。現在まで世界数10都市にわたり開催されてきた。昨年10月から本年1月にかけて開催された「現代日本の書代表作家パリ展SHO2」は、現地パリでも高く評価され、反響も大きかった。

第66回毎日書道展企画展示として「現代日本の書代表作家パリ展SHO2」の出品作品100点を中心に過去の毎日書道展・海外展の足跡をたどり、資料写真や映像などを織り交ぜながら展開することとなった。

1970年から始まった毎日書道展の海外展はこれまで30数回行われているが、すでに関係資料が散逸しており関係者で手を尽くしても限界があり、書道芸術院会員諸氏の中で、これら古い海外展資料をお持ちの方に是非ともご協力願いたいとの要請が院に寄せられた。特に1970年（昭和45年）パリ市チュルヌスキー美術館展（第1回）、1978年

（昭和53年）毎日書道展30回記念パリ展パリ・ソルボンヌ大学礼拝堂会場、1988年（昭和63年）毎日書道展40回記念、北京・上海・ミュンヘン・ウィーン・オッペンバッハ・モスクワ・セントなど各記念展の折の海外展資料を必要としている。ご協力いただければ幸いです。

院事務局（扱い辻元大雲）または毎日書道会へ直接お送りいただいても結構です。（担当 西村事務局長）

中国書法家協会第6回役員

中国書法家協会の第6回役員改選は2012年に行われ、現在左記の通りの体制で組織されている。

（公社）全日本書道連盟および本院との交流の歴史は古く、中書協設立には大きく貢献した経緯がある。書を通じての交流は絶やすことなく継続したい。

主席 張海

副主席 王家新、申万胜、蘇士樹、吳東民、吳善璋、何應耶徒、言恭達、張業法、張改琴（女）、陳振濂、趙長青、胡抗美、聶成文

秘書長 陳洪武

副秘書長 潘文海、張陸一

名誉主席 沈鵬

顧問 王学仲、旭宇、朱関田、劉芸、李鐸、佟韋、張綱、陳永正、林岫

（女）、周慧珺（女）、鐘明善、段成桂、尉天池、謝雲

漢字 (六)

崎井恵風

「意」について

昨年、夏の春洋会書展に出品したものです。「現在を生きる」がテーマで大変難しい作品づくりでした。自分の生き方、今在る自分と対峙して己を見つめてみる事の大切さを意（こころ）で表現しようと思いました。全紙タテ長サイズの紙面に最小限の画数（4画）でシンブルに書く事にしました。余計な線はなるべく書かない、余白を生かすためにも。最終画の「心」を一直線

で長く引く事で三角形の構成を考えました。墨も宿墨が効果的に線の変化を付けてくれ、滲みにも助けられて作品が生まれました。手島右卿先生の言葉に「書は人間体、一切のものから出てくる。」と。書は人なり、自分磨きを肝に銘じます。

平成25年春洋会展出品作品「意」



崎井恵風書

21世紀の書

— 私の主張 —

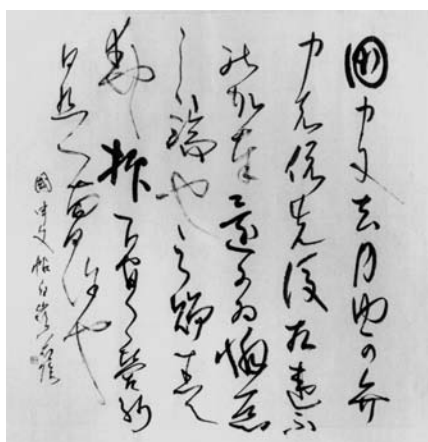
かな (六)

田子白嶺

掲載は「佐理、国申文帖」の拡大臨書で、昨年の書泉会展に出品したものです。佐理は三跡の一人でその書は名筆として高く評価されています。

最初は静かですが、やがて渴筆となるあたりから躍動し奔放な感じます。書的に「何をどうする」とか「理論的にこうだから」といった事にとらわれずに自由に書き進めている。私にはそのように感じます。仏教でいう「さとり」の世界のような、そんな気がします。佐理という人間がこのようになるまでには、

長い年月にわたる多くの努力があったものと想像します。その人間の斬新で独自のものが表現される時「過去を捨てる」と言われる事がありますが、学び得たものの全てが完全に消化、吸収された後に新たに現れるものは、過去が消えて見える。そうした何ものにもとらわれず、執着することのない自由な心境を宗教的に「無」という言葉で言われたりしますが、有に對する無ではなく全ての「有」を内蔵した「無」であると言われます。いくら自由奔放といっても、時代を越え多くの人を魅了し、感動を与える名筆として高い地位にあるので、必ずその理由があり、理論を越えた独自の思想があると思います。そうしたものが少しでも理解できればと思い、大作の拡大臨書にしました。臨書の仕方に関心主体という考え方もあると思いますが、とても自分を加える気にはなれませんでした。逆に原本の独得の感じをどこまで表現できるか、没我的臨書です。その結果遠い将来の夢を持ってました。



150×150cm

田子白嶺書

今回で6回を終わります。ありがとうございました。



土屋 里美
（千葉）



「春來喜氣迎」

書道を習い始めてから20数年、三浦先生そして書道仲間にもお世話になり、良い経験をさせて頂いております。作品は、家族が増える予定なので、その気持ちを込めて書きました。今後自分なりのペースで精進してまいりますので、宜しくお願い致します。

（里美）



神谷 雲卿
（静岡）

「芭蕉句」

この句は芭蕉が難所大井川を越え、小夜の中山にさしかかった時に杜牧の詩をもとに馬上で詠んだ句です。ここ静岡で書の楽しさ、すばらしさを自分なりに伝え広めてゆく努力をしています。

この度の昇格誠に有難うございました。（雲卿）

— 第67回書道芸術院展雑記 —



書道芸術院大賞選考会議



陳列の様子



三宅 佳峰
（岡山）



「瞬間を永遠にする」

故三宅素峰先生、小竹石雲先生、父で師の恒次鶴城先生諸先輩方に支えられて30年。筆が持てる喜びと書の奥深さを痛感しております。「瞬間を永遠に」できるような作品が書いてみたいと思っています。その瞬間の為、日々精進に努めますので、今後共にご指導をお願いいたします。

（佳峰）

風信帖（空海）③

特別研究部臨書課題

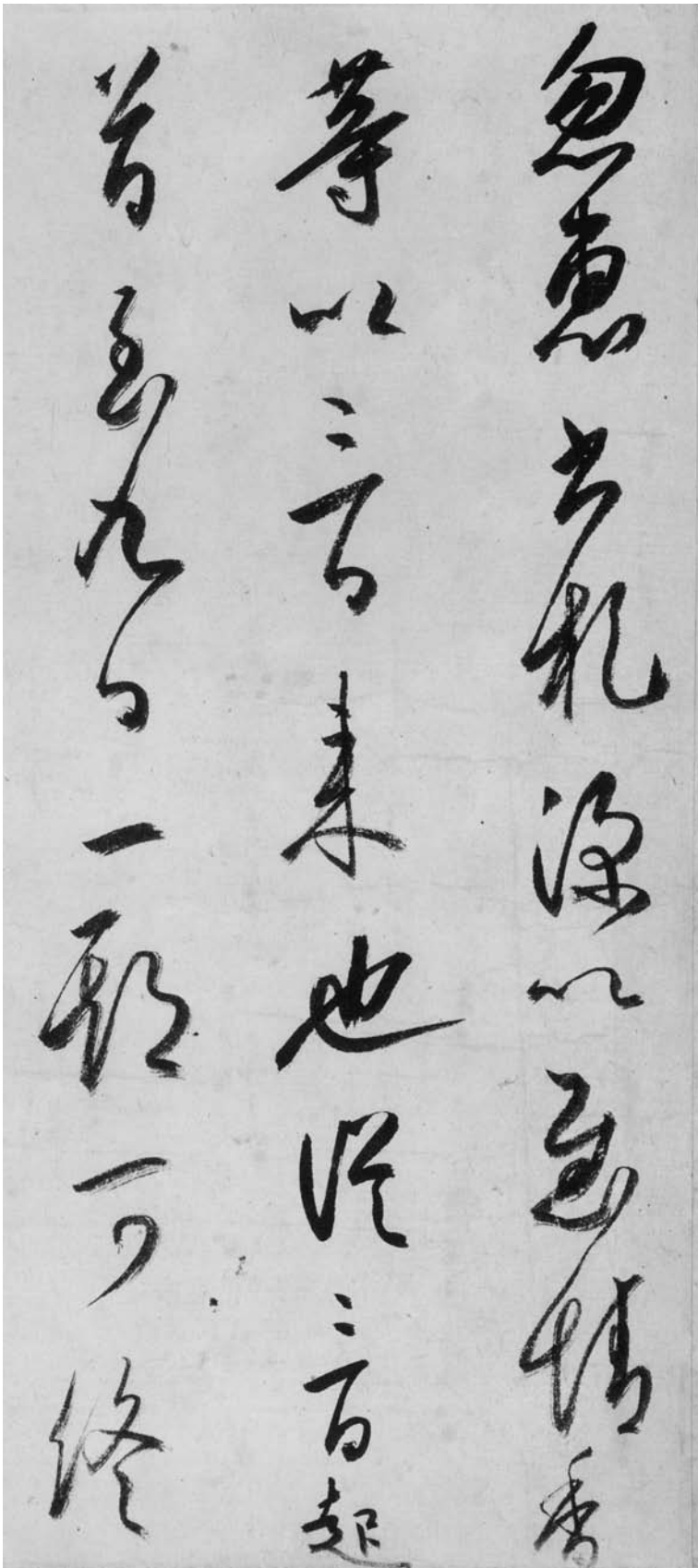
Ⅱ（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可。

〔解説〕 3通とも年号は不明であるが、弘仁3年（812年）頃（諸説あり）に書かれたとされている。第1通目は、9月11日付で「風信雲書」の書き出し。宛名は「東嶺金蘭」とあり、空海が最澄の消息に答えた書状であることがわかる。第2通目は、9月13日付で「忽披枉書」

の書き出し。紙質がほかの2通とやや異なる。宛名がなく、最澄、もしくは藤原冬嗣の両説ある。第3通目は、9月5日付で「忽惠書札」の書き出しである。書体は3通とも流麗な行草体で書かれ、王羲之の書風である。東寺蔵で国宝。

（編集部）

※落款を必ず入れる
署名、もしくは〇〇臨
（押印のみも可）



忽惠書札、深以慰情。香／等以三日一来也。從三日起／首、至九日、一期可終。

古筆鑑賞

藍紙本万葉集
(伝藤原公任)

③

⑫

〈よみ〉

あさばらけこぎいでわれはゆらのさき
つりするあまをみにかへりこむ
くろしがたしほひのうらをくれなる
のたまもすそひきゆくはたがつま
かぜなきのうらのしらなみいたづらに
こゝによりくるみるひとなし

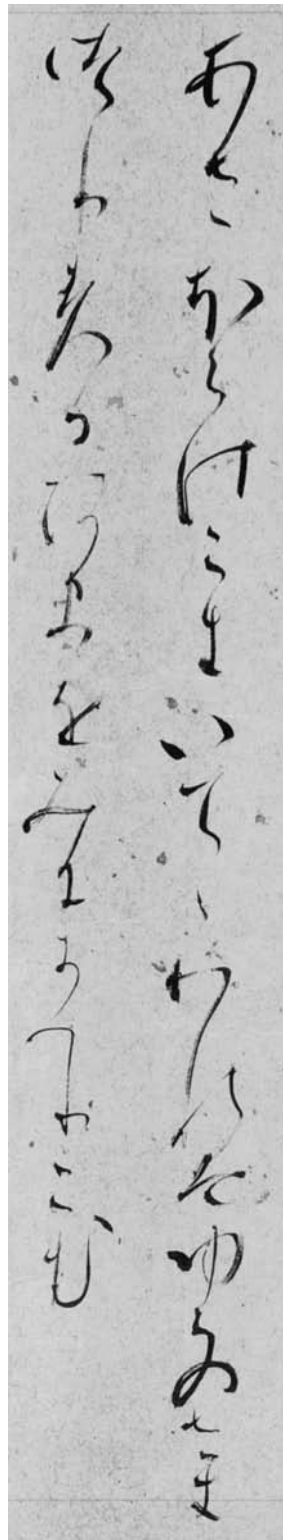
かな研究部臨書課題

- ・競書作品は、左の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。
(全臨も可)
- ・用紙は半紙普通判
(料紙可)
〈たて長に使用〉
別紙を裁断して貼付も可。
半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。

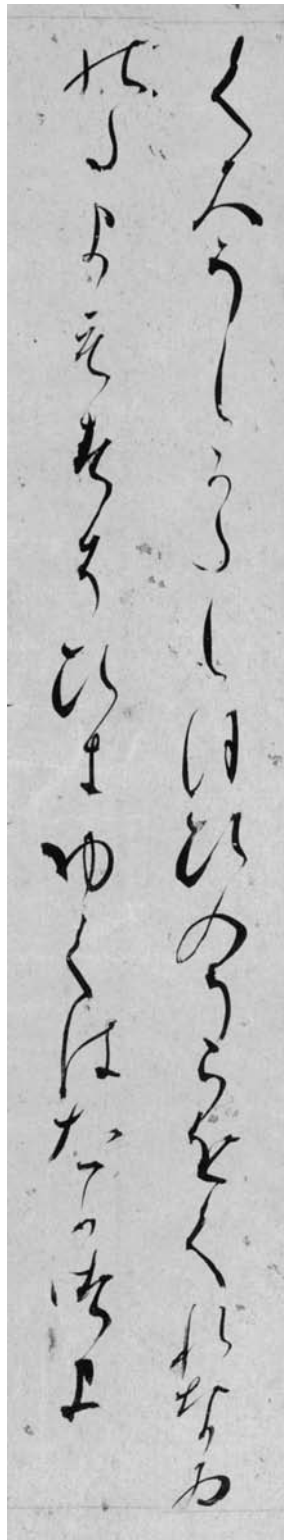
特別研究部臨書課題

- ・毎日展公募サイズ以内・縦横自由
- ・左記の掲載以外も可

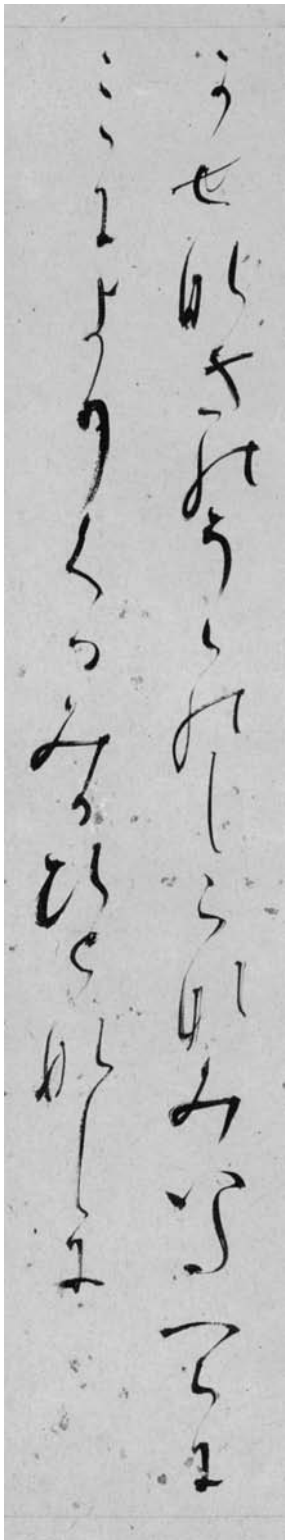
※落款を必ず入れる
署名、もしくは
〇〇臨
(押印のみも可)



(88%縮小)



(88%縮小)



(88%縮小)

〔解説〕
藍紙本万葉集は、
おおむね男手(漢
字の楷・行書)の
歌と女手(かな)
の歌を並べて書い
ているが、長歌は
男手だけで書いて
いる。巻の初めの
字形はそろってい
るが、書き進むに
したがって少しく
づつ崩れていく。僅
か4日間で巻9の
1巻を書写したこ
とと関係があるか
と思われる。
速筆による鋭い
筆勢、強い筆力を
味わいたい。

(編集部)

漢字規定 初段以上 【四月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

大野祥雲選書

當原其初心

祥雲

當原其初心

よみ (當に其の初心を原ぬべし)

書体＝自由

習い方解説 (六)

大野祥雲

當原其初心 (葉根譚)

(當に其の初心を原ぬべし)

仕事に行き詰まり、スランプにおちたときは、初心に返って、筆を持つのは如何か。

「當」旧字体。上部は扁平で幅広く、下部は細めに書き、接筆に注意して明るく。

「原」左払いを伸びやかに。右側の広い余白に「泉」をゆとりをもって収める。

「其」横画、縦画、点による構成のため、点画の形成と組み立てに工夫が不可欠。

「初」偏は点を離し、太目に書く。隣の「刀」は大きさ、位置、空間など考え、偏にとけこむこと。

「心」筆の開閉を生かして伸び伸びと。各所に白をとって、豊かな心にした。

漢字規定 秀級以下 【四月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

名越蒼竹選書

習い方解説 (六)

名越蒼竹

南山之寿
(南山の寿)

(南史)

今回はカッチリした楷書らしい楷書として褚遂良の「孟法師碑」の風で書いてみました。楷書は一画一画を緩みなく組み立てて行くのが基本ですから、起筆・収筆が曖昧でなく、線も筆のパネが利いて張りのあるものが習うのに適していると思います。歐陽詢の楷書はあまりにも完成度が高いため近付き難く冷たい気がしますが、この碑はどこか暖かみを感じられます。起筆は線の進行方向に対して直角に近く、送筆にやや弾力があります。ハネやハライは太く短めに、字形は正方形かやや横広にすると特徴が表現できます。日頃から幅広く古典の臨書を行うことは自分の中に技術の引き出しを増やすのに役立ちます。皆さんの精進をお祈りします。

南山之寿

よみ (南山の寿)

書体＝楷書

南山之寿
蒼竹

かな規定 初段以上 【四月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

平川峰子選書

習い方解説 (六)

平川峰子

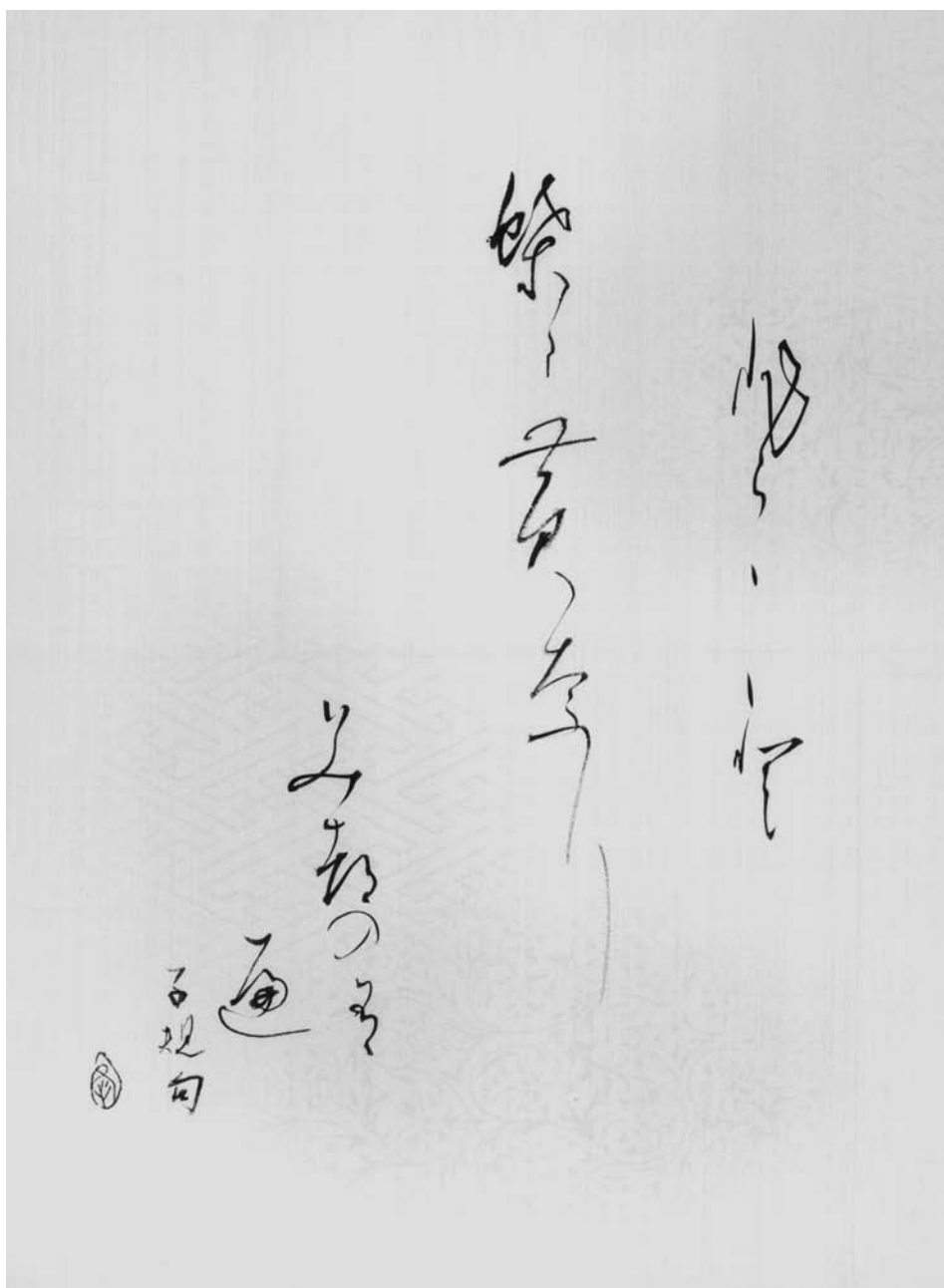
ひらがなのくり返し「ひらひら」
は「ひらゝゝ」と蝶々黄なり水の上

(正岡子規)

ひらがなのくり返し「ひらひら」は「ひらゝゝ」としましたが、他の書き方もあります。漢字のくり返し「蝶々」は「蝶々」とする場合が多いと思います。俳句を作品にする時なるべく作者の使用文字を尊重する方が良いと思いますが今回は変体がなで構成しました。「水」を「みつ」とひらがなだけで書く場合、近年は「みづ」と濁点を付ける時もありますが、あくまでその作品全体の効果を考慮してください。「美都」「美徒」「み都」「み徒」など変体がなとひらがなの交え方で異なった表現ができ、組み合わせは無限に広がります。俳句作品の場合、連綿を控え目に、余白を強調する傾向にあります。最近では自詠の俳句を作品にされる方も多くなりました。

よみ方 ひ(非)らゝゝと(登)蝶々(三)黄な(奈)りみ(美)づ(都)のう(有)へ(遍) 子規句

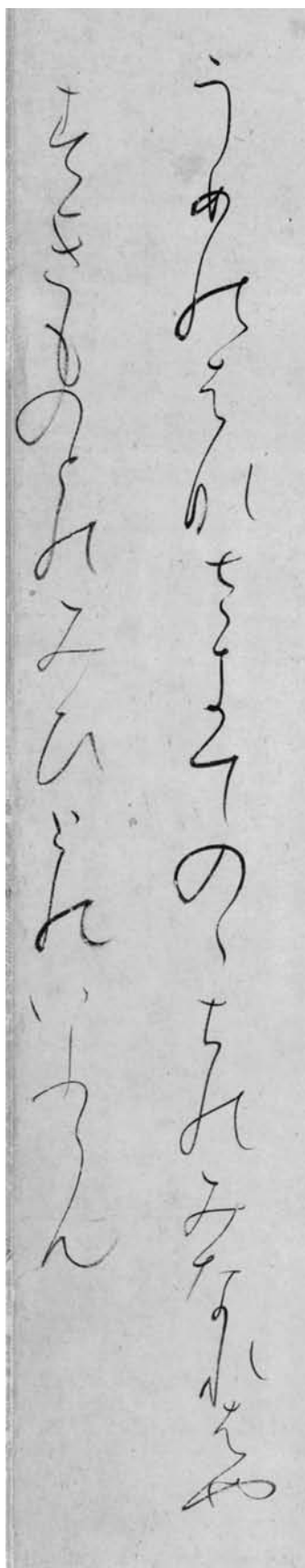
創作



かな規定 秀級以下 【四月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。

高野 切第三種
（掲載写真縮小93％）

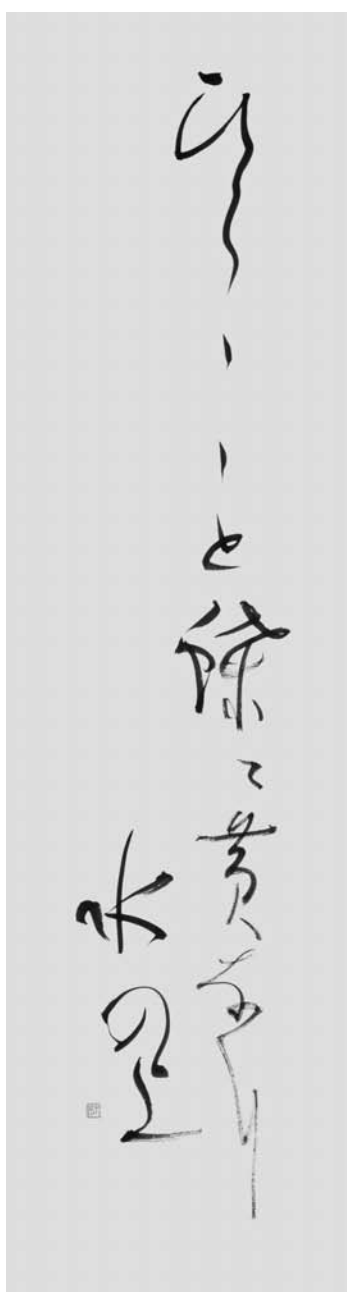


よみ方

うめの(能)は(者)な(那)さき(支)てのゝちの(能)みなれば(者)や
す(春)きものとの(能)みひとの(能)いふらん

かな条幅規定 【四月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切（料紙可）

和氣しげ代 選書



よみ方 ひらゝと蝶々(二)黄なり水の上

創作

習い方解説 (三)

和氣しげ代

ひらゝと蝶々黄なり水の上
(正岡子規)

春風に乗って水面を舞ふ蝶々、のどかな情景句です。書き出しを中心より右に寄せて、左側に大きく余白をとります。2行目「水の上」で墨継ぎ、1行目の下の方に収めます。俳句は字数が少ないので、墨の黒と余白の白との使い方が大切です。

※たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【四月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

牧 泰濤 選書

習い方解説 (六)

牧 泰濤

横作品を書いてみよう

今号は濃墨で、マンガース毫。

毛質堅いので線が細くなる。少し筆管を斜に構えて太細を出すとい

い。
「書は心思微にして、魄力大なるを要す」(清・劉熙載)、書は心持ち、思性が繊細で、精神気魄が強大が必要ということ。六ヶ月の参考手本がそうかと言われると複雑な思いである。要は先人に「不如学」に尽きる。※よこ形式に限る

習い方解説 (六)

竹本 龍汀

漢字条幅規定 秀級以下 【四月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

竹本 龍汀 選書

書体Ⅱ自由

出品券
貼付位置



山雲野樹水墨暗 蘆葉荷花文繡香
(山雲野樹水墨暗く、蘆葉荷花文繡 香ばし)

松静鶴留聲

龍汀

松静鶴留聲

(松静かに鶴聲を留む)

(鄭善夫)

書体Ⅱ自由

今回は五字句一行書です。米芾の蜀素帖の筆致で書いてみました。一字一字、字典で集字したわけではなく、蜀素帖を日常臨書している時に感じた運筆リズムのままです。打ち込みを強く、文字の上部を広く、下部を小さく、右上りでスナップの利いたスピード感のある線、他の米芾のものより端正で品格のある感じでした。皆さんの好きな臨書の筆意で書いてみて下さい。

諸君が困難に会いどうしてよ
いか全くわからない時はい
つでも机に向かって何かを書
きつけるのがよい。〇〇書

用紙Ⅱはがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体Ⅱ自由

習い方解説 (六)

三浦鄭街

担当最後になりました。今回は、小泉八雲（ラファディオ・ハーン）の名言です。

幸せのヒントは「書きながら考えるメリット。」

・書く事で問題を明確にする事が出来る。

・書いていく過程で、問題を整理する事が出来る。

・読み返してみる事で、少しは客観的に考え直す事が出来る。

・同じ考えだけを繰り返さずにすむ。

・書きながら考えるのは良い方法です。

・何でも思いついた事を自由に書けば良いのだと思います。

・書きながら考える方法を身につけ、上達すれば、困った時にとても役に立つ事でしょう。

八雲のこの名言は、パソコン全盛の今日においても、自分で書く事の大切さを教えてくれたように思いました。

1mmの水性ペンを使い、楷書で表現してみました。字数が今までより少ないです。余白を意識して書いてみましょう。

※落款を必ず入れる。

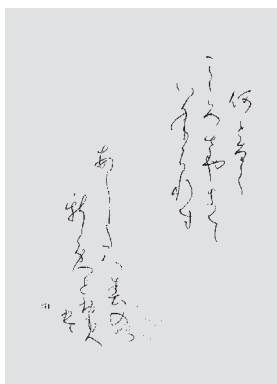
（自分の名前を入れること）

木一作品 各部総評

NO. 633

かな部 師範 大和由紀江

淀みない運筆は古筆を眺めるような魅力です。特に複雑な字を使わないでのこの表現、あっぱれ！
◎かな部総評 テキストの拡大に迷った人が目立った。変体がな難の誤字多く残念。元の漢字を辿って理解して書くこと。(明子評)



漢字条幅部 師範 阿部 祥越

紙墨の選定に工夫を施した作品。切れ味のよい単体を単黄色の紙と磨墨した墨で生かした。落款も佳。
◎漢字条幅部総評 最終選に残って誤字で除外することが多い。秀級以下1行作もさまざまな書体に挑戦を。(翠風評)



現代詩文書部 特選 岡部 江里

詩情豊で爽快感溢れる。沈潜した線により紙面構成した作で、心の安らぎと温もりを感じる作。
◎現代詩文書部総評 豊かな表現大胆な構成美が多く見られ楽しみ多い審査でした。(無極評)



かな条幅部 準師 山村 炎秀

文字をよく理解し、紙質に合わせた墨色で温雅な趣の佳作。線が少々甘いのでさらに研究を！

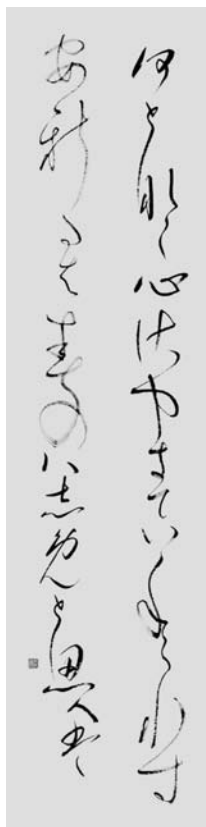
前衛書部 特選 伊藤 有津

大胆で躍動感あふれる線は、他を圧するほどの響きと力強さを見せている。シンプルで見事な作。
◎前衛書部総評 作品中の印の位置、大きさは大きな影響力があるので考慮して押印を。(蓮紅評)



◎かな条幅部総評 総じて誤字も少なく、無難な作が多かった。濃墨は流れが出ないので要注意。鋒先だけの運筆も避けたい。(洋子評)

墨は流れが出ないので要注意。鋒先だけの運筆も避けたい。(洋子評)



漢字部 師範 石川 晴洞

のびやかな筆致の木簡隸表現。5文字のバランス、配置もよく、紙面に動きと安定感を与えている。
◎漢字部総評 上級5文字表現は多彩な書風が多かったが、線のリズムの生彩欠くもの多し。下級楷書も同様だが基礎力を。(大雲評)



ペン字部 師範 落合 敏子

しっかりとした骨格で一画一画ていねいに書かれている。線の重厚さに加え配置も見事な作品。
◎ペン字部総評 漢字の多い課題で楷書でまとめた作品が多かった。行草の作も見うけられたが流れすぎは品格を失うので注意。(景介評)

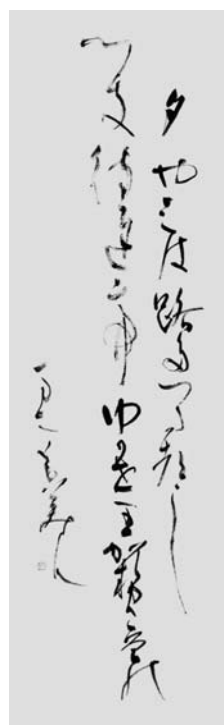
龍門石窟を訪ねて古陽洞に入れた時ドム上の壁一面に彫られた仏像と造像記を見た。それらの彫りの鋭さと素朴な力強さに魅了され、しばしたずんだ。 敏子書

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

かな

(卯月) 酒寄光子 「大宅女の歌(万葉集)」



174×53cm

酒寄光子書

◆筆力と筆勢に溢れ、肉厚の線が豊かさを感ぜさせる。潤筆が少々重く感じるが、墨の濃度にもよるか。

(洋子評)

◆難しい墨色の変化を上手に場を造り表現されたすばらしい技術、濃墨のように感じるが美しい変化。

(倫子評)

◆太目の線で潤筆を多用し、線に厚味を感じる。2行目上部の渴筆と下部の潤筆の変化で立体感がある。

(萬城評)

◆大胆な潤渴の変化を取り入れ、やや厚味ある表現はリズム感もよく爽快な作である。今後に期待する。

(大雲評)

前衛書

(青蓮) 大町菜円 「若葉の季節」



177×54cm

大町菜円書

◆筆の大きな動きから全体に活力が生れて紙面が引き締まって来る。筆、墨、紙と一緒に動いて感動的。

(倫子評)

◆非常に巧みな世界。何より墨色と流れが美しい。チョット傾げた表情で活々と舞い白を掬い上げる。

(洋子評)

◆複雑な色合の変化を見せる青淡墨の潤渴を効果的に生かして妙。中央部ややくい込み不足か。

(大雲評)

◆筆が軽妙に舞い踊り、スピード感が溢れた線が美しい。淡墨の潤渴も効果的で作品の質を高めている。

(萬城評)

◆ゆったりと大きな思いを筆に託し、息を長く伝える表現素晴らしい。墨色の冴えがとぼしいのが残念。

(倫子評)

◆横への振幅の広がり基調となった作。茶淡の柔らかな味わいを生かしているが後半やや萎縮したか。

(大雲評)

◆シンプルな構成に大様な運筆が伸びやか。2本の筆のねじれが複雑な表情を見せ、幽かな彩りが燦る。

(洋子評)

◆淡墨を用い、叙情性に溢れた表現が詩情を一層深めている。奥行の深い世界を作り上げた。

(萬城評)

現代詩文書

(もく) 西川 藤象 「藤田枕流の句」



136×69cm

西川 藤象書



小林純風書

60×180cm

漢字 (奥田) 小林純風

「一陰一陽」

◆やや乱暴とも思える程の荒々しいタッチで横展開する。紙面と正面から向き合う制作スタイルがよい。

(大雲評)

◆荒々しいタッチで書かれた、気迫に溢れる篆書。「謂」字の渴筆が心を惹く。斬新な作風で魅力的。

(萬城評)

◆行草が多い中で体あたりの篆書体が気骨を示す。大小の文字のバランスにセンスが窺え、紙も面白い。

(洋子評)

◆筆にふくませる墨の量によって表現される字の表情が変わって見える面白さ、活力を与えてくれる。

(倫子評)

◆一点一画、着実に再現しようと試み細太、大小、潤濁等を真摯に形臨した臨書の姿勢を評価したい。

(萬城評)

◆誰でも一度は臨する古典だが、原寸に近い方がまとめやすかったようだ。忠実に丁寧のリズムがよい。

(洋子評)

◆一番最初の「風」で筆をおろすとまずその字で先に進まない事を思い出す。全体をよく纏め見事です。

(倫子評)

◆半折一枚にやや拡大しての臨書は余裕が感じられ安定している。字形などもよく観察し充実作。

(大雲評)

前衛書 (秀水) 坂井初江「光」



136×70cm

坂井初江書

◆呼吸をしているような筆の動き、その結果表現されてくる線につながるを感じさせ、まとまった作。

(倫子評)

◆書き出しの卒直な線が印象的。下部の激しい動きと対照的で、紙面に静と動のイメージを定着させる。

(大雲評)

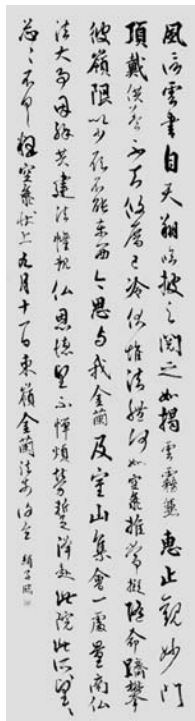
◆墨塊とかすれのバランスが美しい。パターン化した前衛が多い中で、控え目な主張が明るく響く。

(洋子評)

◆滲みの部分に隠された筆の動きが想像される。渴筆部分との対比が効果的で新鮮な作品。

(萬城評)

臨書 (森地) 東平絹子「風信帖」



134×35cm

東平絹子臨

創作の部(57点)

漢字—8点

かな—5点

現代—28点

篆刻—1点

前衛—15点

臨書の部(29点)

漢字—29点

かな—0点

総出品点数

86点

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

〔漢字〕

千葉 竹浪 叙舟

舍人 高橋 小汀

大雲 江本 興舟

〔かな〕

卯月 栗原 信子

〔現代詩〕

佑希 田中 梢翠

うる 今関 心華

大雲 小川 白舟

恵泉 渡邊 信代

蒼風 笹木 蒼風

〔篆刻〕

東総 平野 草堂

〔前衛〕

行徳 浅見 由紀子

四谷 野口 加奈

〔臨書の部〕

〔漢字〕

翠苑 梅田 紅雨

墨縁 大関 典子

安波 鈴木 英晴

竜泉 小林 洋龍

英峰 吉瀬 彩雨

漢字研究部
(風信帖)

選評 辻 元 大 雲

今月のホープ作品



小山内 谷 玲

漢字研究部 特選 小山内谷玲

風信帖の特長をよくとらえ、特に書き出しの重量感ある筆致と形を正確に観察して見事。太細の変化も自然な運筆に伴ってバランスよくまとまっている。落款も全体とよく調和して半紙臨書の典型を見る感あり。

◎漢字研究部総評

日本の書を代表する空海弘法大師の有名な尺牘「風信帖」は書を学習する者にとり必須

の古典であり、特にこの第一通目は臨書経験のない人はいないであろう。書き出しの「風信雲書」は字形の特長や重量感とねばりある筆致を見せて美事である。今回の応募作もここを取り上げたものが多かったが、堂々とした空海の風格に迫るものは少なかった。字形はあくまで王羲之を根拠とした正統的な姿を見せながら、ねばり強さは顔真卿を感じさせる。今回の健闘を祈る。



柳晃惠 栗白
苑光瑒 奈琴

香友紅雅光白
苑香雨邦彩麗

惠雅江景心紅
舟悠里燁華霞

礼智清芳綾美
子広耀香美梢

